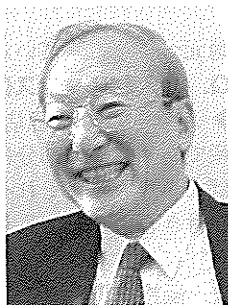


寺松 哲雄
欄寺松商店・社長

中国の古紙需要は 引き続き旺盛



Q. まず、昨年の福島第一原発事故が中国への古紙の輸出に与えた影響を。

▶ もともと中国輸出のライセンスには放射能の基準値が規定されているが、以前はそこまで言及されることはなかった。しかし、原発事故が起きると直ぐに放射線量を測定するよう要請があり、基準値を超えた古紙はシップバック（返送）されることになった。

積み荷だけでなく、コンテナ自体が被爆している可能性も指摘され、それ以降コンテナの内部外部合わせて1コンテナで10個所ほど測定し、写真も同程度撮影している。出荷する側とすればどれを検査されてもよいように、全コンテナのデータを専用のコンピュータで管理しているが、相当なデータ数にのぼっている。

当初、中国からは九州が東日本と同じような状況にあると思われていたが、地理的な違いを説明して誤解を解いた。

そのため中国から九州に対して出荷を抑えるような要請はなく、また、九州地区から出荷された古紙には基準値以上の放射線量が検出されることもなかった。

ただ、中国サイドの検閲が強化されたことで、

中国でコンテナ船が滞留し、バースや港を変更するよう要請があった。

Q. 各地で古紙の持ち去り行為が頻発している。

▶ 九州でも、至る所で持ち去りがある。各地で資源ごみの持ち去りを禁止する条例が施行されているが、それで菌止めが掛かっているようにも感じられない。こういった状況が取まらないのは、持ち去った商品を受け入れている問屋側にも責任がある。

いくら発生量が低調であっても、古紙問屋として良識ある買い付けをすべきだ。また、持ち去り行為に対して法律的に対処し難いため踏み込んだ改善策が執れない、というのも行政側の責任放棄と言える。

行政回収を依頼する側の行政と、受ける側の古紙問屋がある程度の回収量を見込み、それをベースに契約上の業務を遂行している。

しかし、持ち去り行為によってそのベースに狂いが生じ、業務を委託されている側のわれわれが円滑に業務を遂行出来ずに困っている。そういう現実があるのに、所有権云々の法的解釈を理由に、取締りの実効性を発揮できていないのは行政側の責任放棄である。

行政回収・集団回収に出した古紙を、関係者以外の者が勝手に持ち去ることはおかしい、そんな簡単な物の道理が通らないような社会は面白くない。

Q. 昨年、古紙の国内価格と輸出価格が逆転した。

▶ 昨年10月に国内製紙メーカーの建値が上がった。また、中国国内の製品価格の下落と欧州危機による需要低迷で、中国大手製紙メーカーの発注する輸入古紙価格が下がった。そこに1ドル70円台の円高という要素が加わって、結果的に国内価格と輸出価格が逆転している。

古紙の国際市況には、高値を修正したいというムードがもともとあった。景気が悪くなれば製品価格は下がるのが常で、古紙だけが高値で独り歩きすることはできず、やはり、価格は下がってきた。

また、昨年来の円高で製造業は製造原価を下げるため、大規模なリストラや製造拠点の海外移転などを実施している。それに比べてわれわれは、扱っている商材が市況品であるため市況に見合った買い付けをするだけで、レートがいくらになっても事業基盤は変わらない。ただ、為替が変動するという点では商売がやり難い。

仮に1ドル77円が続き、古紙の輸出価格が国内価格より安い状態が続くのであれば、それに見合った買い付け価格に直せばよいし、そうすれば国内の市況も下がっていくだろう。しかし、今の価格が一過性であり、いずれ元に戻るだろうと考えるなら、暫くは辛抱して国内価格に合わせて買わざるを得ない。

Q. 中国の古紙需要の先行きをどう見るのか。

▶ 日本のように紙の生産が減少しているのではなく、中国は紙の生産量自体はまだ増えている国なので、古紙の需要は引き続き旺盛であることは間違いない。そのような中で、一時的に市況が悪くなっているだけで、今の状況は仕方がないと思っている。

当社のヤードにはほとんど在庫がない状態で、在庫があってもランニングストック程度である。古紙業界は余剰という時代を長く経験してきたので、在庫という意識は常にあった。そのため在庫する用地は確保してきたし、それを今でも保有している。用地は都市部に比べても広いので、輸出の市況が悪ければ一時在庫するという手もある。しかし、中国から今まで通りの出荷要請があり、古紙の出荷を休ませてくれない。この買い意欲は以前から変わっていないし、まして輸出先とのパイプさえしっかりしていれば、今のように輸出の市況が悪くても当社クラスの出荷量にはほとんど影響はない。

国内の古紙の発生量が減り、中国の古紙需要は相対的に増える方向にあるのだから、今の内外価格の逆転はいずれ元に戻ると思っている。そう考えれば、やはり今暫くは辛抱といったところだろう。

*



【寺松哲雄（てらまつ・てつお）】

1946（昭和21）年・福岡県久留米市出身／慶應義塾大学卒業後、寺松商店入社、02年社長／久留米地区リサイクル事業協同組合理事長／生活の信条＝世間に“嘘”をつかない